木の家ネット第11回総会
宮城大会報告

陸前高田の風景

1 2 3 4

Like 0　ポスト

10月8日から10日まで、宮城県石巻市で木の家ネットの第11期総会宮城大会が開かれました。
3月の東日本大震災から７ヶ月。大震災の前の年の11月に神奈川県鎌倉市で行われた第10期総会 神奈川大会の時に次期総会候補地として宮城県石巻市から参加されていた佐々木文彦さん（ササキ設計）が手を挙げられました。年明けの1月に同じ宮城県の 徃見寿喜さん（樹音建築設計事務所）、遊佐茂樹さん（古遊工房 遊佐建築）も加えた宮城大会の実行委員会が発足し、佐々木実行委員長のもとで、着々と準備が進められていました。

そこに起きた未曾有の大震災。震災から数日間、三陸海岸に面した石巻市北上町十三浜にお住まいの佐々木さんと連絡がつかず、随分と心配しましたが、インターネットの安否確認サイトを通じて娘さんから連絡があり、ご家族がご無事であること、そして、自宅兼事務所が津波ですべて失われたこと、「相川子育てセンター」に避難所ができ、そこで集落の方たちと共同避難生活を送られていることを知りました。

その後、三陸に救援物資を届けに行ったメンバーが佐々木さんから「総会は予定どおりの日程で行います。復興に向かう石巻を見に来てください」というメッセージを預かってきたのでした。ご自身の生活の再建もままならない時に、総会の開催を宣言された佐々木さんの決意に、多くのメンバーが秋には三陸に行こう！と心に誓ったのでした。

この動画は非公開です

総会開催の決意を木の家ネットの会員に伝える佐々木さんのビデオメッセージ。収録は2011年4月。

メインの日程は10月9日の午後から。その前日の昼からは、隣県の岩手県陸前高田市の菅野照夫さんの案内で、平泉、気仙沼、陸前高田をまわるプレツアーも行われました。３日間の様子を、参加者の方のレポートをもとに、ご紹介いたします。

10/8 プレツアー（悠山想 宮本繁雄）

菅野さんの出迎えで始まったプレツアー

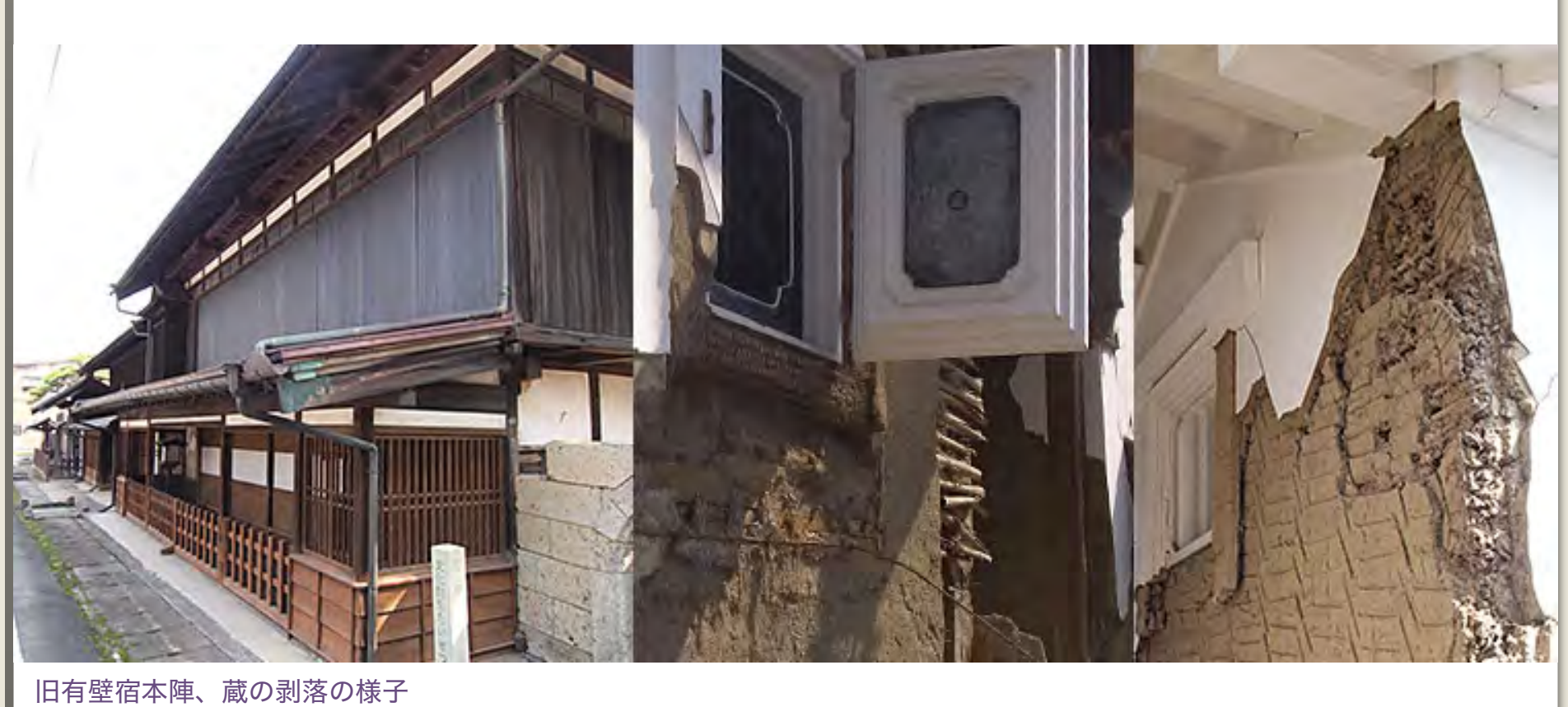
10月8日、憧れの奥州平泉に行きました。一ノ関駅では、世界遺産になったからでしょうか、駅長さんを始め、関係者の皆様、木の家ネットの運営委員のみなさんも出迎えてくださいました。その中に、３月に陸前高田で東日本大震災に遭われた菅野照夫さんの姿もありました。

三陸海岸のごく近くでありながら、少し高台に住まわれている菅野さんのお宅は、直接的には被災しなかったのですが、ご近所の多くが家も何もかも津波に流されて避難所生活を余儀なくされていました。私が前回菅野さんにお会いしたのは、５月。震災後のご活動で心身ともに疲れられたのでしょうか、その時は入院されていました。それ以降、どうされたか心配していましたが、久しぶりにお会いした菅野さんは、本来のお元気な姿を見せてくれました。菅野さんの元気溢れる運転で、最初の見学地である奥州街道有壁宿の有壁本陣へと向かいます。

気仙大工の技量を注ぎ込んだ 有壁本陣

旧有壁宿本陣は、元和五年（1619年）に奥州道中の宿駅として創設され、参勤交代制度が確立した後は、松前・八戸・盛岡・一関の藩主や各藩重臣が通行の際に宿泊した場所として知られています。気仙大工60人余が普請にあたったと伝えられ、屋根庇の下り船がいづくり、戸袋の細工など、気仙大工の技量を注ぎ込んだ仕事ぶりが随所に見られます。

二階建ての長屋門と御成門があり、その堂々とした姿に往時の栄華が窺えます。初めはご当主の方から「地震の被害でみっともなくなった姿を、とてもお見せできない」と断られてしまったのですが、菅野さんの交渉で陣内を見学させて戴き、お話を伺えることになりました。長屋門から宅内に入り、勝手にてお話を伺いました。



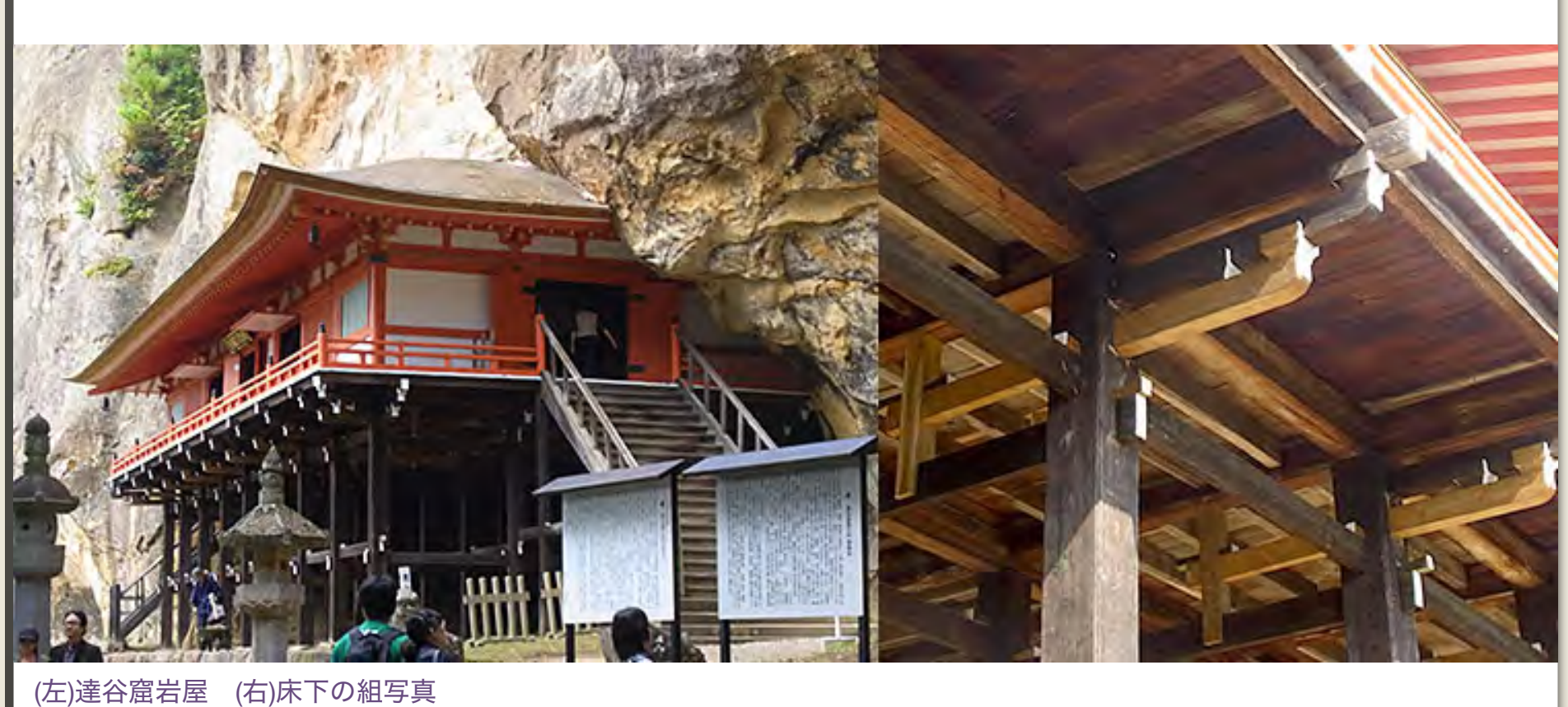
旧有壁宿本陣、蔵の剥落の様子

主屋の地震被害は土壁の隅部に亀裂が入る程度で済んだようですが、７棟ある土蔵の外壁の崩落は著しいものでした。建物の東西方向に揺れが加わり、初期剛性の高い土壁がまず崩れたものと思われます。外壁の土壁は防火上必要とされたもので、構造体としての意識はなく塗られていたのでしょうが、結果的に耐力要因として働いたようです。

外壁の剥落具合と比べると、蔵の内部は一部漆喰が剥落し貫が露出した箇所もあるものの、土壁の被害は軽微なものでした。しかし元通りに修復するための費用は、1億円を超えるだろう事でした。非常に厳しい状況ですが、何とか元の姿に戻って欲しいものです。

奥州藤原氏の栄華を今に伝える中尊寺金色堂へ

次に達谷窟（たっこくのいわや）毘沙門堂を経て、中尊寺の金色堂に向かいます。達谷窟は懸造りで、挿し肘木を応用した天秤梁の納め方に興味を抱きました。

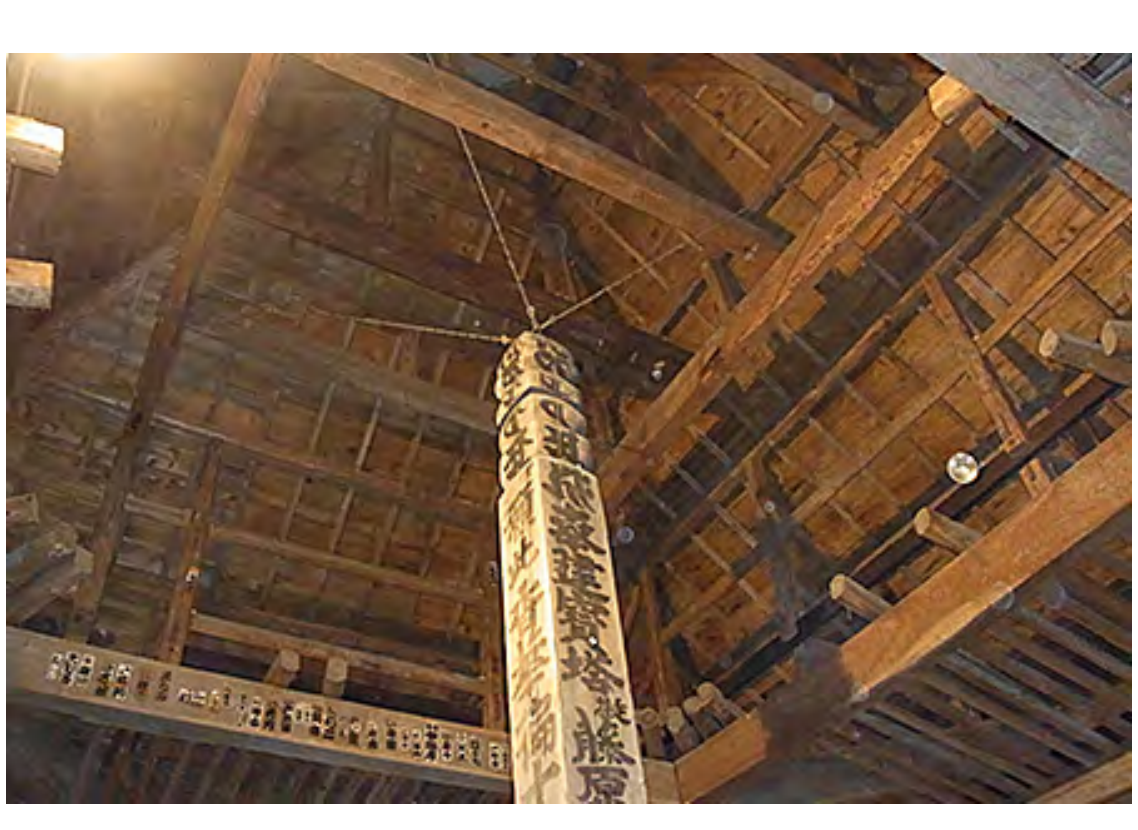


(左)達谷窟岩屋　(右)床下の組写真

金色堂は平面の1辺が三間ほどの小型の仏堂です。阿弥陀如来のいる極楽の燦然と輝く光を表現するために、堂の内外に金箔が貼られており、鉄筋コンクリート造の覆堂内のガラスケースに納められています。瓦が木製であることに驚きました。覆いが必要なのも頷けます。さすがに当時の中央政権の大和朝廷に対してその文化の高さを知らしめた建物だけあって、大変見応えのあるものでした。

金色堂の外に芭蕉の句碑がありました。「五月雨の 降りのこしてや 光堂」。あたりの建物が雨風で朽ちていく中で、この金色堂だけが昔のままに輝いている。まるで金色堂にだけは五月雨も降り残しているようではないか、という意味だそうです。

続いて旧覆堂も見学しました。奥州藤原氏初代藤原清衡が1124年に建設した当初は風雨にさらされていましたが、室町時代中頃に覆堂（おおいどう、さやどう）が建設されました。以来、現在の覆堂になるまでの約500年間、金色堂を雨風から守っていたのがこの旧覆堂で、現在の覆堂の建設時に、移築されたそうです。松尾芭蕉がこの地を訪れた際には、この旧覆堂の中にある金色堂を見たのでしょう。隅木の支えに火打梁（隅ごおり）の上に束を立てるという、おもしろい構法が見られました。



旧覆堂内部

和洋折衷の蔵と欅普請の邸宅 横屋酒造

平泉駅前の食堂では初めて「わんこそば」に大人気なくも興奮。その後、現在では「千厩 酒のくら交流施設」として公開されている、旧横屋酒造・佐藤家住宅を訪れました。明治から大正期にかけて建造され、材料、構造、意匠などがそれぞれに異なる25の蔵と横屋酒造の主人である佐藤家の主屋とが立ち並ぶ見事な建造物群です。和洋折衷の建物に気仙大工の技が光る、大正浪漫が漂う独特の空間を満喫しました。

(左)旧横屋酒造 西洋館　(右)立ち並ぶ蔵

佐藤家住宅は、欅普請の立派な邸宅です。二階の広間は、オオヒロマ24.5帖にヒロマ17.5帖の併せて42帖という大きさです。気仙大工の手法の特徴が、床板の張り方に見てとれます。天井板に使われている欅を見ると、白太部分の変色が見られ「欅は赤身使い」と言われる訳がわかります。

【経済復興】岩手県一関市 千厩酒のくら交流施設
共有
見る YouTube

「千厩 酒のくら交流施設」の紹介ビデオ

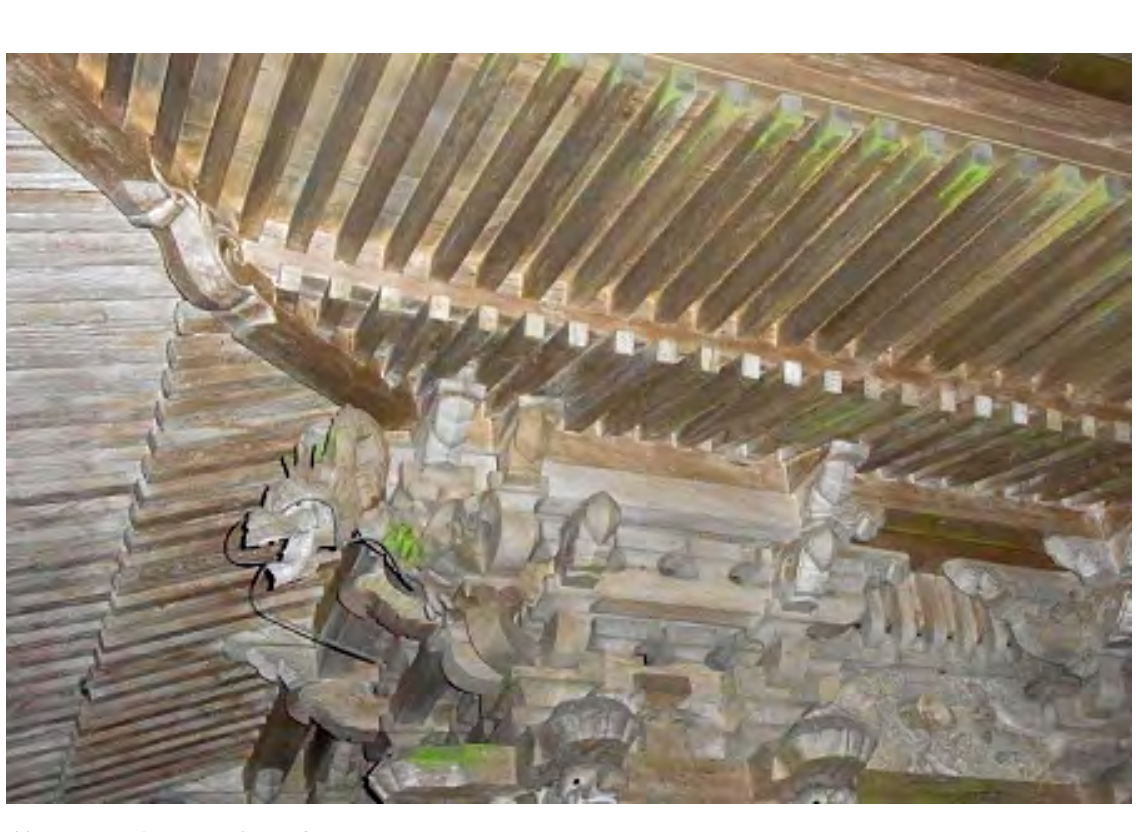
気仙大工の大工技術

構造技法：投掛け梁、火打梁
造作技法：扇垂木、扇状の縁板張り、板長押
大工技術の修得・継承：「新撰 早引匠家雛形」
杣、木挽きとの協力体制

陸前高田で想う 気仙大工をとりまく職人文化

最後の訪問地の陸前高田は、高度な技術を誇る気仙大工の里であり、菅野さんの地元でもあります。5月に訪れた時と比べると瓦礫は随分片付けられていましたが、私は震災前の陸前高田を知りませんので、5月時点での陸前高田としか比べようがないのが残念です。静かな海でした。

普門寺の三重塔は高さ12.5mと小さいのですが、造りの精緻さに圧倒されます。初層は二軒繁垂木、二層には全面彫刻の板軒、三層には扇垂木を用いるという具合に、軒の意匠が、一層ずづ異なるのには驚かされました。
普門寺の三重塔について詳しくはこちら



普門寺、初層の軒の様子

気仙大工の技術の高さはもちろんですが、気仙はリアス式海岸のすぐそこまで山がせまり、気仙杉という立派な建築用材を産する土地でもあります。そのすぐ裏山に木を育て、適材適所を見きわめる目のある木挽棟梁がいて、「気仙かべ」と呼称される壁工がいてと、気仙大工をとりまく確かな腕をもった職人集団が存在し、豊かな職人文化が花開いていた層の厚みを実感させられます。彼らに仕事を依頼する人々の目の確かさは言わずもがなです。現代に暮らす私たちに『伝統に学ぶ』ことを改めて感じさせてくれるプレツアーでした。プレ企画をご立案戴いた菅野、渡辺両氏に深く感謝申し上げます。

（悠山想 宮本繁雄）

Like 0　ポスト

1 2 3 4

千厩横田酒造の玄関天井

木の家イベントカレンダー

最近の特集記事

2019年6月15日

やさしくて強い、理想の家を求めて: アイ設計研究室 大前泰秀さん

2019年5月15日

磨き上げた職人技で、木を生かす：西岡建築一級建築士事務所　西岡健一さん

2019年4月20日

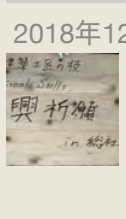
大工と左官の職人プロジェクトチーム 総合建築植田 植田俊彦さん 俊司さん

2019年4月10日

本物の家づくりを、自由に、楽しんで：株式会社木神楽　高橋一浩さん

2019年1月5日

新春特集 2018年のベストショット集

2018年12月29日

板倉仮設住宅 移設ものがたり part3 大工の声＆今後の課題編

2018年12月17日

板倉仮設住宅 移設ものがたり part2 実録編

2018年12月14日

板倉仮設住宅 移設ものがたり part1 概要編

2018年9月4日

番匠 剱持工務店 副棟梁・剱持大輔さん

2018年8月15日

鶴岡総会予告 その１　散るより、生き延びよ！

人気のある記事

伊勢神宮遷宮・御杣始祭り：300年の大木を伐る！
17件のビュー

冬の温熱調査合宿報告
15件のビュー

家のお風呂　こうやって作る、こうやって保つ
15件のビュー

大工たちによる「家戻し」の記録
14件のビュー

込み栓角ノミ 復活！松井鉄工所訪問記
14件のビュー

設計士・丹羽明人さん(丹羽明人アトリエ)：納得できる答を探して
11件のビュー

古川 保の熊本市川尻町 震災日誌
11件のビュー

工務店・西條正幸さん(ビオプラス西條デザイン)：北海道で無垢の木の家づくり
10件のビュー

設計士・古川保さん(古川設計室)：木の家づくりは仕組みづくり
9件のビュー

設計士・川端眞さん（川端建築計画）：小さな石場建ての家
9件のビュー

この記事のタグ

災害と木の家

同じタグがついた別の記事

2016年5月21日
熊本震災調査レポート

2016年6月9日
大工たちによる「家戻し」の記録

2016年6月21日
熊本震災レポート２

2014年3月11日
3.11後を生き抜くコミュニティーの力　牡鹿半島 福貴浦より

2010年1月16日
新潟県中越地震被災地訪問レポート

関連する記事はこちら

里山循環大工：池山琢馬（一峯建築設計）

3.11後を生き抜くコミュニティーの力　牡鹿半島 福貴浦より

独立電源
OFF GRID の家
独立電源＝オフグリッドの家

大場江美さん(サスティナライフ森の家)、日影良孝さん(日影良孝建築アトリエ)：手のひらに太陽の家

伝統構法をユネスコ無形文化遺産に！

事務局
〒711-0906
岡山県倉敷市児島下の町5丁目7-3
児島舎内
mail： jimukyoku@kino-ie.net
tel： 086-486-5464

木の家ネット第11回総会
宮城大会報告

登米高等尋常小学校校舎（現＝教育資料館）

1 2 3 4

Like 0　ポスト

10/9 集合〜高橋恒夫先生講演会（木の家ネット事務局 持留ヨハナエリザベート）

北は北海道から、南は九州から木の家ネットのメンバーが集合場所の「とよま観光物産センター」に続々と集まってきます。受付を済ませた者同士で連れ立って、北上川のほとりにある、佐々木さんの設計で山形から土蔵を移築再生した鰻屋さん「東海亭」に向かい、鰻重を突っつきながら、一年ぶりの再会に話を咲かせます。

受付には実行委員の遊佐茂樹さん（宮城県大崎市 古遊工房 (有)遊佐建築）。震災直後は、地元の協力でにぎった大量のおむすびを持って行って、配っていたそうです。

高橋恒夫教授の講演会
全国に名を轟かせる技能集団[気仙大工]について学ぶ

昼食を済ませた後は、来た道を引き返し、観光物産センターのホールで、東北工業大学の高橋恒夫教授の講演会を聴きました。

高橋先生は、気仙大工を始めとする「在方集住大工」の研究をされています。集住大工とは、高い技術を買われ、地元から離れた地域に出稼ぎに行く大工が、特定の地域にまとまって住んでいる、そのような大工集団を言います。「在方」と付くのは、城下町に職人が集まって住んでいる例とは違って、農村地域にその集住する集落があるためです。彼らは、彼らの生活圏外からも、仕事を頼まれ、その期待に応えるだけの技術を磨き、伝承してきた、技能集団でありました。

東北工業大学の高橋恒夫教授

気仙大工のふるさと
今泉の町に見る「大工による自治」

全国に名の聞こえた「気仙大工」。その出自が宮城県気仙沼市と勘違いされることが多いのですが、気仙沼には気仙大工はいません。旧南部藩の陸前高田市気仙町が、気仙大工のふるさとです。

この動画は非公開です

高橋先生の講演会のビデオ（1時間6分）

高橋先生には、気仙でも大工の集住率の高い「今泉」という集落の様子を古い写真、図面、野村工芸制作の街並再現模型の写真などを、スクリーンに投影して見せていただきました。開口部を片寄せした、雁木づくりの小ぶりの町家が、メインストリートに妻面を見せて立ち並んでいます。指物は使わず、吊り束を入れているのが、独特のつくりです。

かつて、参勤交代の折に大人数の武士が今泉に宿を取った時に、どのように分宿するかを検討した図面が残っています。それを見ると、大工棟梁が個々の家の間取りまで把握していることが分かり、大工棟梁が村長として自治を司る「大工村」とでも言うべき暮らし方をしていたのではないかということが窺い知れるとのお話を聴きました。

町家が整然と立ち並ぶ 今泉の模型

震災を経てあらたに思う
「ひと昔前を手本に」

ところが、この今泉の集落も三陸海岸から目と鼻の先に位置しており、東日本大震災で津波の被害に見舞われ、壊滅的な状況となってしまいました。被災前と被災後の写真を見せていただき、その生々しさを実感させれらました。集落の端はかつて、気仙大工の技術が集約された「大木守屋敷」という村長（むらおさ）の館がありました。かつてこの館に使われていた材が、選り分けられ、一カ所に集められていました。気仙大工のふるさとに、その技術の結晶である建物が再建されることについての希望も語られました。

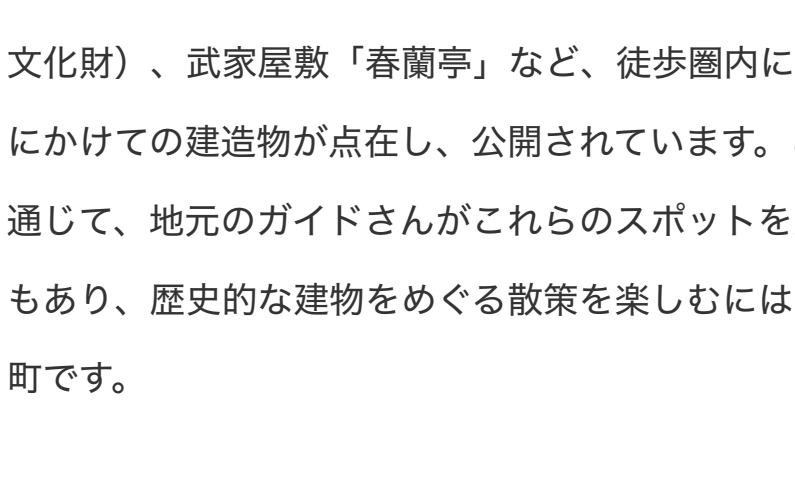
先生は、集住大工のお話に入る前に「震災で分かったことは２つあります。ひとつは、電気、水道、電話などといった社会的インフラがいかに脆弱なものであるか、国に頼っていればなんとか生きて行けるというのは間違いだということです。これからは地域で自立していくような形でしか生き延びられません。そのために『ひと昔前』を手本にしましょう」とおっしゃっていたのが、翌日に佐々木さんに案内していただいた避難所での自立した生活と結びつき、総会全体を通してとても印象的な言葉として心に残りました。

（木の家ネット事務局 持留ヨハナエリザベート）

10/9 登米（とよま）町中心部散策（一峯建築設計 池山琢馬）

「みやぎの明治村」登米（とよま）町

講演会が終わると、全体が数グループに分かれ、地元のガイドさんの案内で旧登米（とよま）町界隈の探索にでかけました。登米町は北上川を利用した米の舟運で栄えた町です。「みやぎの明治村」と呼ばれ、旧登米高等学校尋常小学校校舎（国指定重要文化財）、水沢県庁記念館（市指定重要文化財）、旧登米警察庁舎（県指定重要文化財）、武家屋敷「春蘭亭」など、徒歩圏内に江戸期から明治期にかけての建造物が点在し、公開されています。とよま振興公社を通じて、地元のガイドさんがこれらのスポットを案内するサービスもあり、歴史的な建物をめぐる散策を楽しむには、とても魅力的な町です。

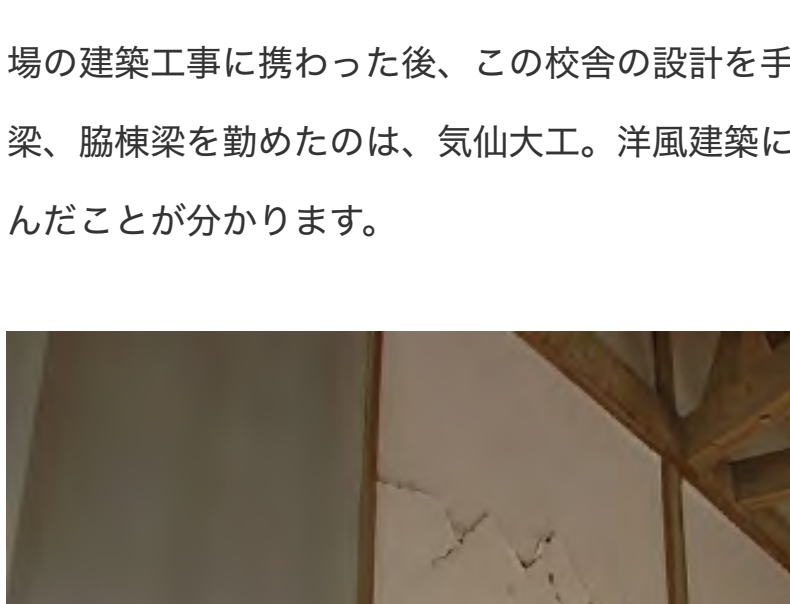


登米観光公社のガイドさん

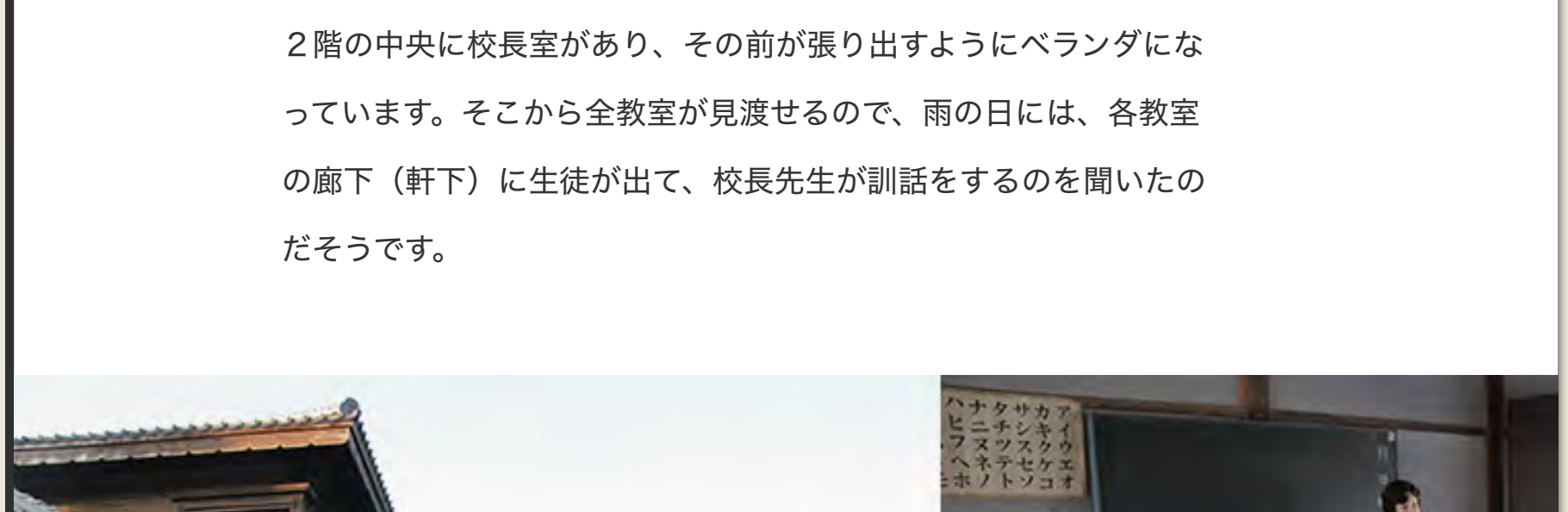
登米町の中心部は、津波被害に遭った沿岸部から奥に入っているため、津波の被害はないのですが、地震そのものの爪痕が感じられるところは局所的に点在していました。大破はしていないものの壁が一部崩れているところ、割れたガラスがそのままになっていたりするところがそこかしこに見られました。車ではつい見過ごしてしまいそうですが、歩いてみてはじめて、やはり相当な揺れがあったのだと実感しました。

電灯のない昔に想いを馳せる
登米高等尋常小学校校舎

観光物産センターの西隣にある国の重要文化財「登米高等尋常小学校校舎（現＝教育資料館）」もその例にもれず、当時からの薄いガラスの多くが割れ落ちていたり、壁の藁がむき出しになっている所もありました。明治20年に完成したこの校舎は、建築家山添喜三郎の設計によるものです。喜三郎は「政府御雇い外国人」のワグネルに従って洋行、欧米の建築について学んで帰国し、仙台の紡績工場の建築工事に携わった後、この校舎の設計を手がけました。棟梁、脇棟梁を勤めたのは、気仙大工。洋風建築にも積極的に取り組んだことが分かります。



この校舎のレイアウトに、特徴があります。２階建ての校舎全体がコの字状に配置されており、コの字の先端の２カ所に児童玄関が、２階の中央に校長室があり、その前が張り出すようにベランダになっています。そこから全教室が見渡せるので、雨の日には、各教室の廊下（軒下）に生徒が出て、校長先生が訓話をするのを聞いたのだそうです。



(左)登米高等尋常小学校校舎（現＝教育資料館）の西半分。白いベランダの２階奥に校長室 (右)当時の授業の様子を再現した教室も

「この壁の色の呼び方はわかりますか？」とガイドさんが、教室の中で皆に問いかけました。「灰色？」と応えると、答えは「ねずみ色」とのこと。このねずみ色という壁の色が、電気照明のない当時の小学校の教室においては、朝日や夕日に反射してもまぶしすぎず、かつ暗すぎず、目に優しいとして推奨されたのだと言います。今でこそ学校では昼までも電気照明を点けるのが当たり前になっていますが、電灯のなかった時代に子どもたちが学んでいた校舎の光を体験することができました。

古い建物を保存するということが、過去の建築を残すというだけでなく、便利すぎる現代に対して、その時代のなんらかの知恵を与え続けるという意味もあるのだなと、思えました。

地元の材料でつくるということ

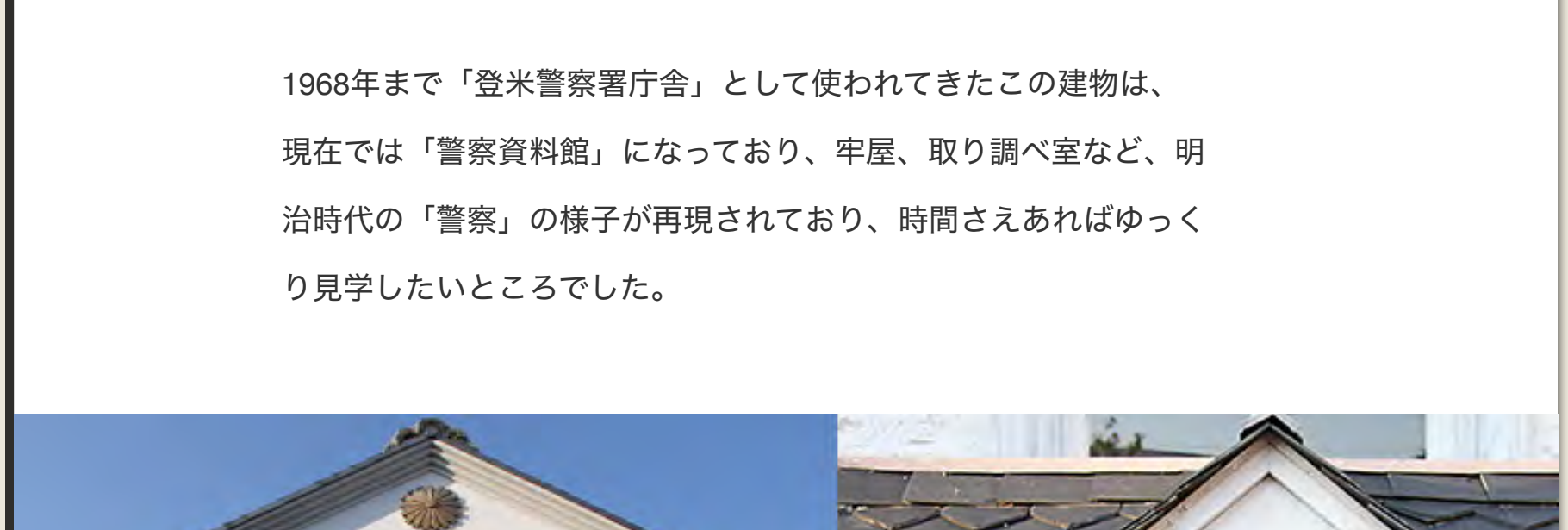
旧小学校の校門（通称赤門）を後にして、旧登米警察庁舎へ。道中、倒れたまま放置された門、塀の周りに板状の「石」が散乱していました。このあたり特産の「玄昌石（げんしょうせき）」、いわゆる「天然スレート」です。薄く加工し、屋根材として利用されてきたようです。

遠くからわざわざ取り寄せるのでなく、ごく近くにある、地元の素材を工夫して用いている、それこそが「地域性」ということなのだなと思いました。屋根材についていえば、瓦屋根が全国的に広まったのは、大分時代が下ってからのことであり、それまでは杉木端、茅葺きなどというように、各地で調達しやすい材料で施工されてきたのです

(左)地震で落ちたスレート葺きの屋根 (右)スレート葺きの塀も

初めて見る「天然スレート」に建築仲間たちも、興味津々。足をとめ、じっくりと観察していました。今回の総会では時間がなかったので回れなかったのですが、石巻市には雄勝町という天然スレートの一大産地があるのだそうです。

1968年まで「登米警察署庁舎」として使われてきたこの建物は、現在では「警察資料館」になっており、牢屋、取り調べ室など、明治時代の「警察」の様子が再現されており、時間さえあればゆっくり見学したいところでした。



(左)登米警察署庁舎 正面　(右)庁舎の脇にあった案内板の屋根もスレート葺き

古い建築物を保存する町は
文化を継承する町

「古いからよい」と無条件に言えるわけではありませんが、現代とは違った価値観をあらわしている古い建物から学べるものは多いと思います。全国各地で、古い建物がどんどん解体されていく中、それらを壊さずに保存し続けてきたこの町の姿勢に、感銘を受けました。

「建築基準法以前の建物だから」耐震性が低いのだとはいえない、そういった古い建物でもしっかりしたものはそれなりの耐震性があるのです。「古い建物でもしっかりしたもの」に学ぶこともたくさんあるのではないでしょうか。

また、建物を保存するということは、建物というハード面だけでなく、体験できる形で文化が継承されているということでもあるのだと思います。地方都市の中心部でも、目先の利益を優先した無秩序な再開発が多い中、この「登米」が町ごと「みやぎの明治村」を維持し続けたことに、大きな敬意を表します。これからの町づくりを考えるのにいいヒントがいっぱい詰まっているなと、ぼんやり考えながら、観光物産センターに戻りました。

（一峯建築設計 池山琢馬）

Like 0　ポスト

1 2 3 4

登米町には「武者隠し」といって、戦の時に身を隠して敵を迎え撃つため、通りに対して斜めに構えた建物が数多くある。通りの反対側は逆向きの構えになっいる。

関連する記事はこちら

里山循環大工：池山琢馬（一峯建築設計）

3.11後を生き抜くコミュニティーの力　牡鹿半島福貴浦より

独立電源
OFF GRID の家

独立電源＝オフグリッドの家

大場江美さん(サスティナライフ森の家)、日影良孝さん(日影良孝建築アトリエ)：手のひらに太陽の家

伝統構法をユネスコ無形文化遺産に！

木の家イベントカレンダー

最近の特集記事

2018年3月27日
伝統建築に携わるすべての職人に光を

2018年2月7日
「伝統建築工匠の技：木造建造物を受け継ぐための伝統技術」ユネスコ無形文化遺産候補選定のおしらせ

2018年1月2日
新春特別企画 2017年のベストショット

2017年12月14日
第17期木の家ネット総会：倉敷大会 -民家改修と曳家-

2017年10月14日
気候風土適応住宅のチラシができました！

2017年9月4日
家のお風呂　こうやって作る、こうやって保つ

2017年8月8日
家にお風呂が入るまで

2017年6月30日
気候風土適応住宅のススメ

2017年6月3日
掛川総会３

2017年5月31日
掛川総会２

人気のある記事

伊勢神宮遷宮・御杣始祭り：300年の大木を伐る！
17件のビュー

家のお風呂　こうやって作る、こうやって保つ
15件のビュー

冬の温熱調査合宿報告
15件のビュー

大工たちによる「家戻し」の記録
14件のビュー

込み栓角ノミ 復活！松井鉄工所訪問記
14件のビュー

設計士・丹羽明人さん(丹羽明人アトリエ)：納得できる答を探して
11件のビュー

古川 保の熊本市川尻町 震災日誌
11件のビュー

工務店・西條正幸さん(ビオプラス西條デザイン)：北海道で無垢の木の家づくり
10件のビュー

設計士・古川保さん(古川設計室)：木の家づくりは仕組みづくり
9件のビュー

設計士・川端眞さん（川端建築計画）：小さな石場建ての家
9件のビュー

この記事のタグ

災害と木の家

同じタグがついた別の記事

2015年7月27日
独立電源＝オフグリッドの家

2014年6月5日
大場江美さん(サスティナライフ森の家)、日影良孝さん(日影良孝建築アトリエ)：手のひらに太陽の家

2015年9月15日
里山循環大工：池山琢馬（一峯建築設計）

2016年4月28日
古川 保の熊本市川尻町 震災日誌

2016年6月21日
熊本震災レポート２

事務局
〒711-0906
岡山県倉敷市児島下の町5丁目7-3
児島舎内
mail： jimukyoku@kino-ie.net
tel： 086-486-5464

木の家ネット第11回総会
宮城大会報告

宴会の最後の一本締め。音頭をとっているのは樹音建築設計事務所の往見寿喜さん。

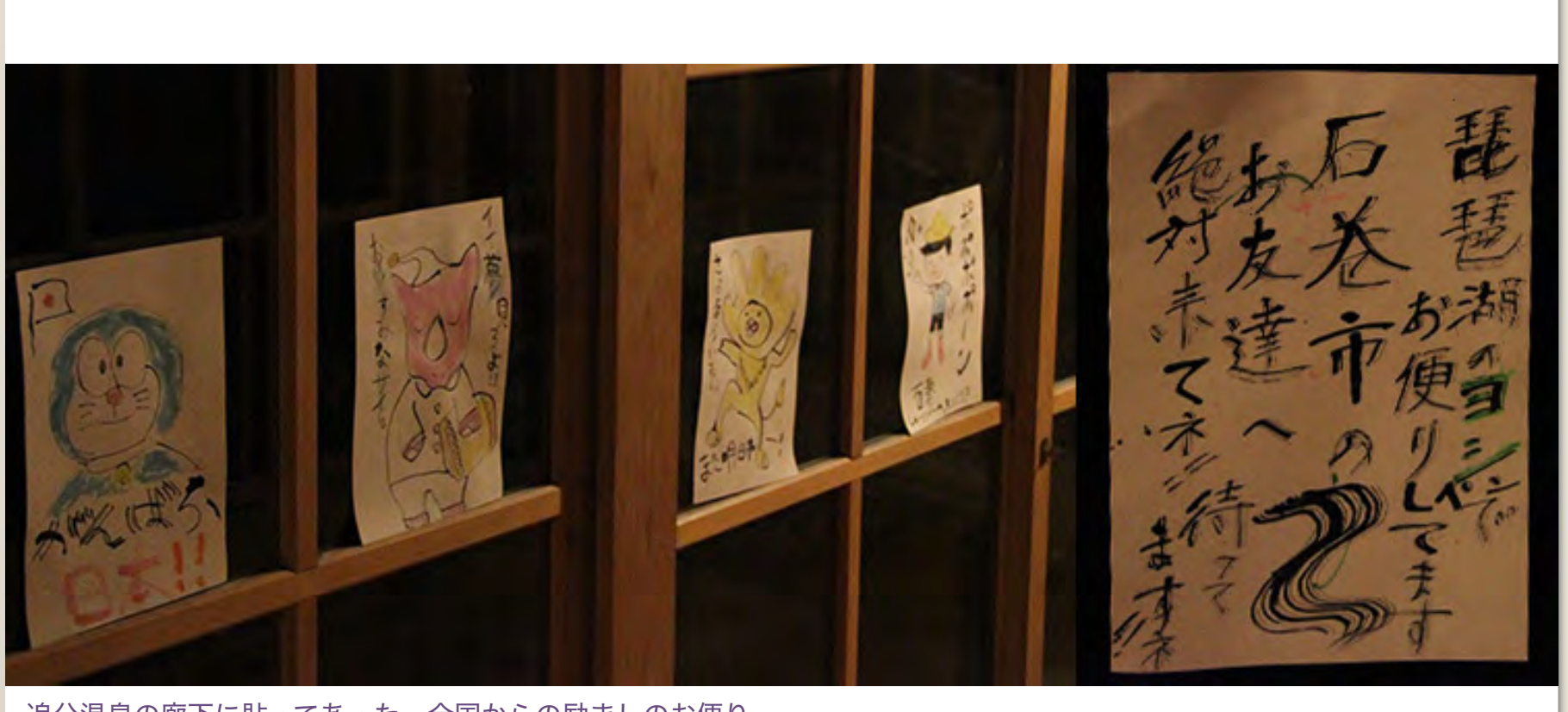
1 2 3 4

10/9 追分温泉での宴会（樹音建築設計事務所 往見寿喜）

日暮れの峠道を追分温泉に向かう

東北の10月始めといえば、もうかなり日が暮れるのが早く、散策を終えた一行が集合場所に戻る頃にはかなり日も傾いていました。総勢80名が石巻のバス会社でチャーターしたバスと遠方から来た「愛知」「札幌」「三重」「山梨」など、さまざまなナンバーの自家用車に分乗し、追分温泉に向かいました。

追分温泉は登米市と石巻市との間に横たわる翁倉山と高津森山の間の峠の石巻側にある一軒宿です。車もすれ違えない、細く蛇行した峠道を走るうちに、日がとっぷりと暮れ、宿に到着するまでには辺りは真っ暗になっていました。心細くなりかけた頃に、追分温泉の宿灯りがポッと現れました。



追分温泉の廊下に貼ってあった、全国からの励ましのお便り。

避難所や支援者宿泊所になった追分温泉

宿に着くと、一部の参加者は思いもよらぬ部屋割を知らされてしまいます。追分温泉に宿泊できるのは55名ほどで、後の20名ほどは、宴会後バスで登米から来た道を戻り、日中に見学をした登米市内の「望遠閣」に泊まることになるのです。望遠閣泊となった方たちは、宴会前に温泉に入れても、浴衣に着替えてのんびりというわけにはいかず、申し訳ないことでした。ここであらためて、お詫びを申し上げます。

追分温泉での受付。ここで宿泊先を知らされる。

ところで、今回の総会準備でもっとも苦労したのは、宿の手配でした。震災前には、80名で追分温泉に予約ができていたのですが、震災後、追分温泉が被災者受け入れの宿となったために、総会で宿泊できるかどうかという見通し自体がつかなくなってしまったのです。登米市の何箇所かでの分宿も検討したのですが、どこでも当然、被災者や被災地支援者が優先となるため、総会まで1ヶ月を切る頃になっても、80名の宿泊場所確保には程遠く、途方に暮れました。

それでも、９月初旬に追分温泉でなんとか50名程は宿泊できるということになり、一安心。あとの20名の宿泊場所が登米の「望遠閣」に決まったのは、総会まであと数日という時で、本当にひやりとする思いをしました。みなさんの宿がどうにか確保できてよかったです。（編集注：幹事の皆さん、本当にお疲れさまでした）

実は、この総会の夜は、追分温泉が震災後、一般のお客を受け入れる初の夜となったのです。宴会の始めにご主人の横山さんからご挨拶がありました。「大震災の日以来、ずっと避難所のオヤジをしてきました。もう宿をやめようかと思った時もありました。けれど、今晩はひさしぶりに、温泉宿の主人として、宴会料理に腕を奮わせていただき、これからも宿を続けていこうと気持ちを新たにしました」大震災から半年間、被災者・被災地支援者の宿泊所を切り盛りしてこられたご主人の想いが伝わってきて、胸が熱くなりました。

追分温泉のご主人、横山さん。地元でバンドを組んでいて、夜は仲間たちと音楽三昧。総会の夜も、木の家ネットのメンバーがギャラリーとなり、人垣ができた。

宴会と恒例の分科会

大広間にて佐々木実行委員長の挨拶、加藤代表の挨拶、高橋教授の乾杯の発声により宴会が始まりました。

宴会料理も当初の予定では、宿泊人数50名分しか出せないということでしたが、追分温泉の温泉宿としての再スタートへの決意の表れか、ずいぶん気を張って何とか全員分出していただくことができ、感謝しています。海の幸、山の幸を美味しくいただきながら、宴会は和やかに終了しました。

（樹音建築設計事務所 往見寿喜）

10/9 分科会〜10/10 相川子育てセンターでの総会とバスツアー（木の家ネット事務局 持留ヨハナエリザベート）

総会恒例の分科会

宴会の後は、登米に戻る20名ほどのみなさんのバスを見送り、総会恒例の分科会です。テーマ別の部屋に分かれ、車座で、お酒やおつまみも入り、夜を徹して語り合います。

追分温泉での分科会

追分温泉組は、ひとつの部屋で、午前中に講演を聴いた高橋恒夫先生を囲んで、震災後に先生が東北各地を歩いて見てこられた被災状況の写真を見せていただきました。もうひとつの部屋では、第11期に更新する時にひとりひとりにアンケートを寄せていただいた「原発についてどう思うか」の集計結果をもとに話し合いました。登米では、全体の人数が少なかったので、全員が原発についてのテーマで語り合いました。

大型バスで総会会場へ

２日目の集合場所となった熊谷産業の作業場。壁面が茅で覆われている。

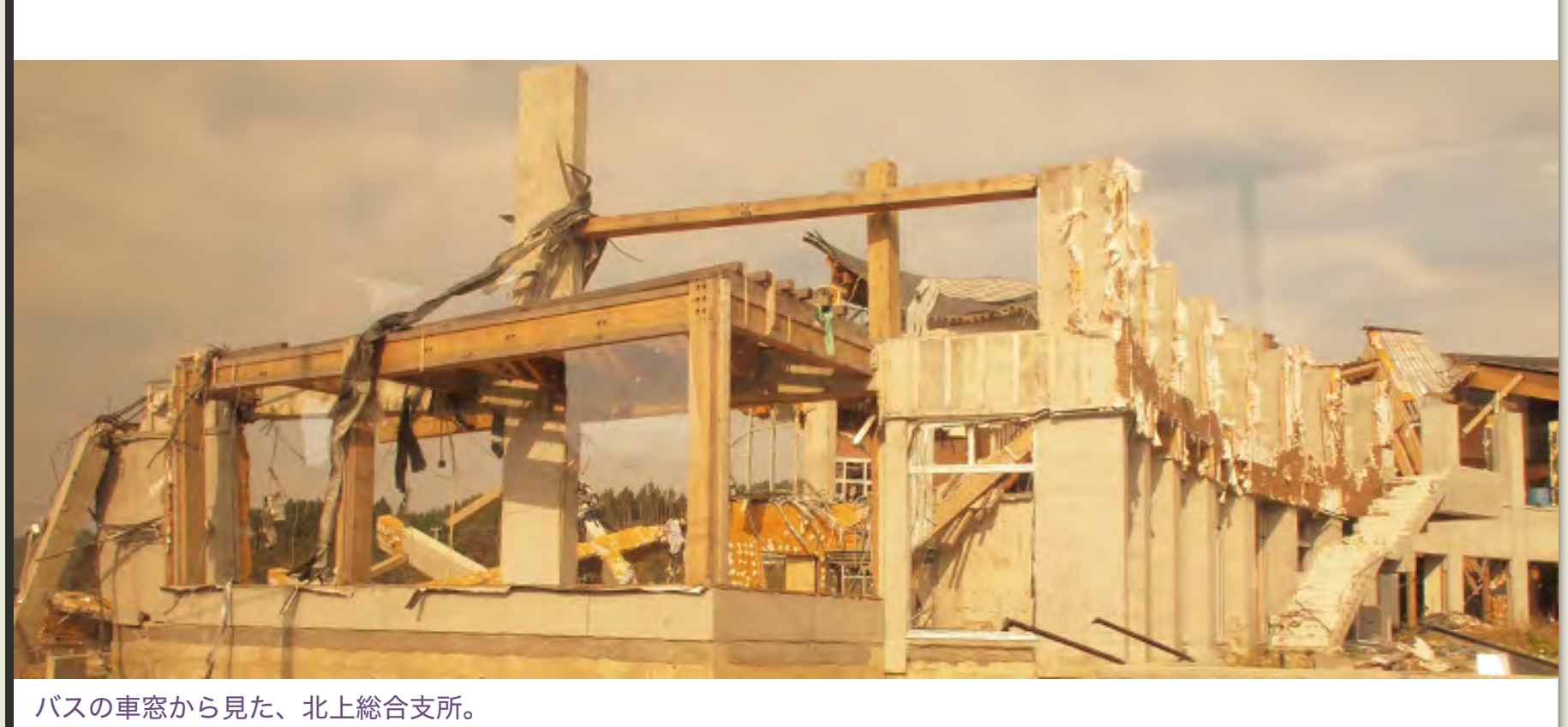
総会２日目も快晴に恵まれました。追分温泉組は山を下り、登米・望遠閣組はバスに揺られ、地元の茅葺きやスレート等を扱う屋根会社・熊谷産業さんの駐車場で再度、全員集合し、２台の大型バスに分乗し、総会を実施する相川子育て支援センターに向かいます。

バスは北上川に沿って下流へと走ります。海から北上川の河口を溯上するにつれて、20m以上もの高さにふくれあがった津波が襲った場所を通りました。震災から半年過ぎ、道路は通れるようになっているものの、その両側には基礎と土台をわずかに残して跡形もなくなった家の敷地、塩水で真っ赤に立ち枯れた林、学校など、津波の脅威をみせつけられました。

地震にも耐えた釣石神社の巨石
爆撃跡のような北上総合支所

「落ちそうで落ちないの巨石があることでみんなが合格祈願をする釣石神社の釣石は、今回の地震にも耐えました」佐々木さんが、76戸のうち73戸が津波で流されたという集落のすぐ後ろにある丘を指差して教えてくださいました。
釣石について詳しくはこちら

その後、報道でよく目にした石巻市役所北上総合支所のすぐ脇を通過しました。地震直後、RC造+大断面木構造の混構造２階建ての庁舎の２階に避難した住民の多くが犠牲になったところです。すべてが流され、そこにとどまるしかない基礎だけが残っている、爆撃にあった跡かのような様相を呈していました。
北上総合支所の被害状況について詳しくはこちら



バスの車窓から見た、北上総合支所。

北上川河口付近の被害状況

すぐ隣にある吉浜小学校には３階まで津波が押し寄せたそうです。時計が地震のあった2時46分のままで停まっていました。遊具や校舎の中にあったものはすべて水に持って行かれ、窓もなく壁も部分的に崩れていました。窓や壁があったはずのところに水に運ばれた無数の木材や突き刺さり、瓦礫や木材が堆積しています。「これでも大分、片付いたのですよ」と佐々木さんがおっしゃいました。被災当時の様子は、想像もつきません。

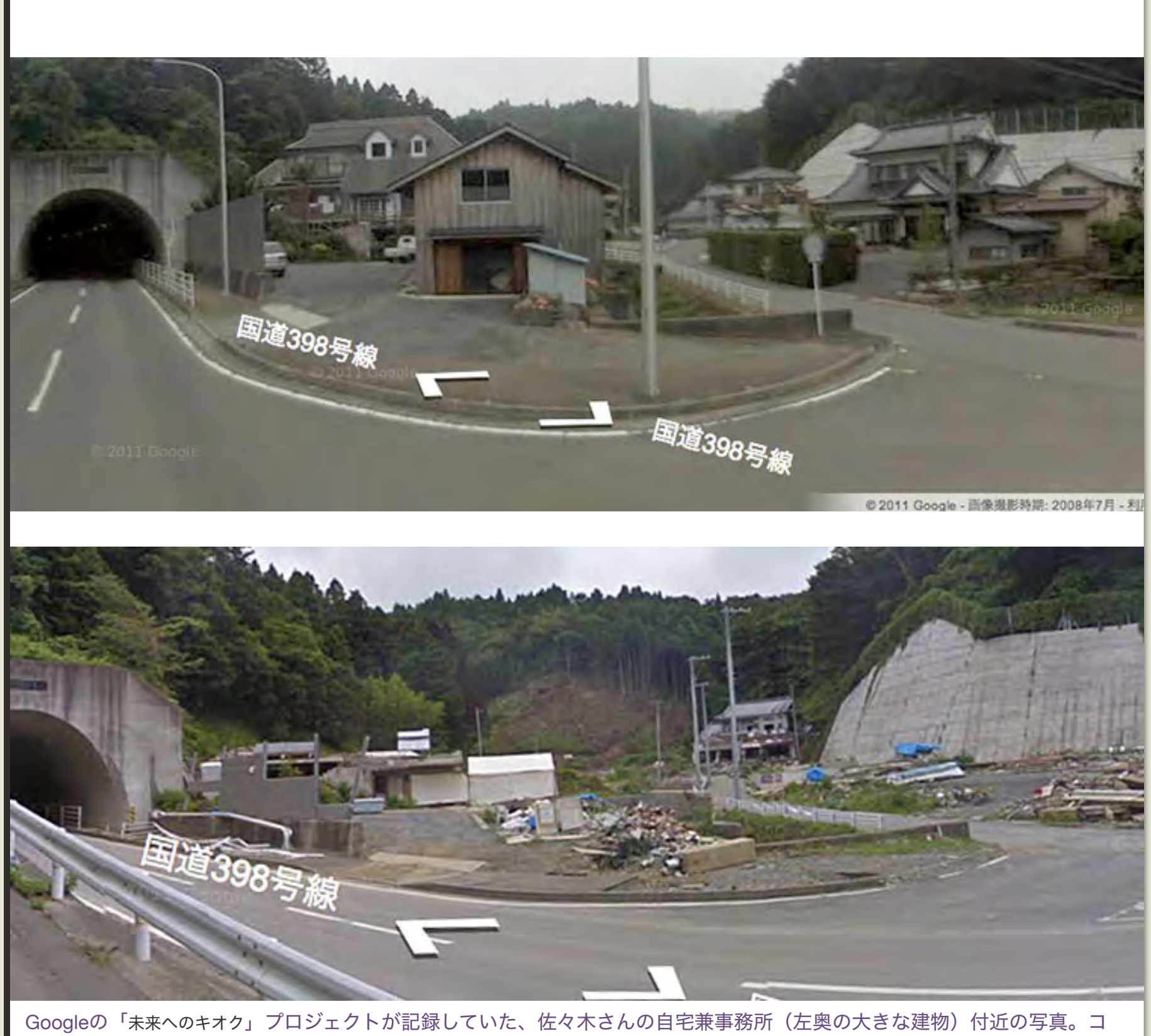
地震当初、学校にいた子どもたちと先生方は、３階の上にある階段の塔屋に上って辛うじて助かったのだそうです。校舎には、吉浜小の子どもたちは、同じく校舎を失った相川小学校の子どもたちと共に、校舎が残った橋浦小学校に通っています。
北上川河口付近の被害状況について詳しくはこちら

北上川の河口にかかる新北上大橋は、津波で壊され、大震災から半年以上以上経ってなお、通行はできないので、対岸の雄勝方面に行くには10キロほど上流の飯野川橋まで戻らなければなりません。（2011年11月末には、新北上大橋の修理が終わり、開通したそうです）

大橋のすぐ向こうには、避難方法が具体的に定まっていなかったために、地震が発生して津波が到達するまでの時間が30分ほどありながらも、児童・教職員の7割が津波の犠牲になった大川小学校跡があります。バスの中から川向こうを臨み、「これから」があったはずの子どもたちの魂の冥福を祈り、手を合わせました。

被災地の状況を目の当たりにして、
何を受け取って帰るのか

車窓からの風景を見るにつけ、何でもなかったところと、ごっそり津波でもっていかれたところがいかに紙一重であったかと驚かされます。基礎と土台しか残っていない家のお隣がそのままに残っていたり、集落のあるラインから下は、そこに集落があった痕跡がわずかに見てとれるだけだったり・・。



Googleの「未来へのキオク」プロジェクトが記録していた、佐々木さんの自宅兼事務所（左奥の大きな建物）付近の写真。コンクリートでできた１階部分だけを残し、木造の２・３階が完全に無くなってしまった。

「赤く立ち枯れた木があるところまでは、水が押し寄せたのです」と佐々木さんが教えてくださいました。新聞やテレビ、インターネットで断片的に知っていたつもりになっていたことが、初めて実際の場所に起きたこととしてとらえられました。

しかもそれが半年後の「かなり片付いた状態」であると知り、想像を越える被害の大きさが、重く迫ってきます。ご自身も被災し、それをすべて身をもって体験した上で、私たちを案内してくださっている佐々木さんが「被災地を見にきてください」とおっしゃった思いに対して、私たちひとりひとりは何を受け取り、持ち帰り、これからの仕事に活かしていけるのでしょうか。

大きなインフラに頼りすぎず、地域で自立して生きて行く力とは？ 多くのガレキを生み出さないような建築のあり方とは？ コミュニティーを再生する復興とは？ 避けがたい自然災害に人はどう向き合い、備えればよいのか？ この震災から何を学び、どこへ向かうのか？ 今回の総会に出席したひとりひとりの心に課題や、発見や、確信など、何かしらを確実に心に刻んだ、大切な総会になったと思います。

（木の家ネット事務局 持留ヨハナエリザベート）

Like 0　ポスト

1 2 3 4

津波の力で真横に曲げられてしまった、佐々木邸のすぐそばの街灯。

関連する記事はこちら

里山循環大工：池山琢馬（一峯建築設計）

3.11後を生き抜くコミュニティーの力　牡鹿半島 福貴浦より

独立電源＝オフグリッドの家

大場江美さん(サスティナライフ森の家)、日影良孝さん(日影良孝建築アトリエ)：手のひらに太陽の家

伝統構法をユネスコ無形文化遺産に！

木の家イベントカレンダー

最近の特集記事

- 2016年12月23日 掛川総会
- 2016年8月2日 込み栓角ノミ 復活！松井鉄工所訪問記
- 2016年6月21日 熊本震災レポート2
- 2016年6月9日 大工たちによる「家戻し」の記録
- 2016年5月21日 熊本震災調査レポート
- 2016年4月28日 古川 保の熊本市川尻町 震災日誌
- 2016年3月31日 2/16 衆議院第二議員会館 調査報告会レポート
- 2016年1月27日 地域型住宅の省エネルギーを探る ～2016.1.17 京都フォーラム報告
- 2016年1月14日 第15期 木の家ネット総会 高知大会 ～会員発表篇～
- 2015年11月13日 工務店・小田貴之さん（オダ工務店）：木の家づくりのプロデューサー

人気のある記事

- 伊勢神宮遷宮・御杣始祭り：300年の大木を伐る！ 17件のビュー
- 家のお風呂　こうやって作る、こうやって保つ 15件のビュー
- 冬の温熱調査合宿報告 15件のビュー
- 大工たちによる「家戻し」の記録 14件のビュー
- 込み栓角ノミ 復活！松井鉄工所訪問記 14件のビュー
- 設計士・丹羽明人さん(丹羽明人アトリエ)：納得できる答を探して 11件のビュー
- 古川 保の熊本市川尻町 震災日誌 11件のビュー
- 工務店・西條正幸さん(ビオプラス西條デザイン)：北海道で無垢の木の家づくり 10件のビュー
- 設計士・古川保さん(古川設計室)：木の家づくりは仕組みづくり 9件のビュー
- 設計士・川端眞さん（川端建築計画）：小さな石場建ての家 9件のビュー

この記事のタグ

災害と木の家

同じタグがついた別の記事

- 2012年6月15日 原発に頼らない家づくり＆暮らし方
- 2016年6月21日 熊本震災レポート 2
- 2014年6月5日 大場江美さん(サスティナライフ森の家)、日影良孝さん(日影良孝建築アトリエ)：手のひらに太陽の家
- 2016年4月28日 古川 保の熊本市川尻町 震災日誌
- 2015年9月15日 里山循環大工：池山琢馬（一峯建築設計）

事務局
〒711-0906
岡山県倉敷市児島下の町5丁目7-3
児島舎内
mail： jimukyoku@kino-ie.net
tel： 086-486-5464

木の家ネット第11回総会
宮城大会報告
職人がつくる木の家ネット
第11期総会宮城大会

白浜復興住宅の近くで、記念撮影。

1 2 3 4

👍 Like 0　X ポスト

10/10 総会～白浜復興住宅（木の家ネット事務局 持留ヨハナエリザベート）

避難所として使われた
山の上の相川子育てセンター

海岸部から急坂をあがった山の上に、第11期総会を開催する相川子育てセンターがあります。相川子育てセンターは、以前に相川中学校のあった場所に新築し、平成23年度からのオープンする予定だった幼稚園兼子育て支援センターで、落成式を迎える直前に震災にあったそうです。本来の目的に用いる前に、佐々木さんの住む集落をはじめ、沿岸部の７つの集落の避難所として使われることになりました。

相川子育て支援センター（中央下）と「集団地」の集落。GoogleMapより

まずびっくりしたのは、この山の上にあるセンター付近一帯が20軒ほどの密集した集落になっていることでした。昭和８年の大津波で被災した集落が、山の上に集団移転したところで「集団地」と呼ばれているそうです。ライフラインが寸断された状態の中、救援物資が届くまでの間、家にあるありったけのもので避難所に集まった人たちの炊き出しを担ったのは、集団地の方たちだったそうです。

分科会報告、第11期総会と
車座座談会「津波で被災するということ」

９時に総会が始まりました。前夜の分科会の発表に引き続き、第10期の会計報告、サイトの現状、「削ろう会」出展など埼玉メンバーの活動や伝統的構法の性能検証実験および設計法構築のための検討委員会の活動報告などが駆け足で行われました。また、職人がつくる木の家ネットとして何らかの形で「原発はいらない」という意思表明をしていくことが確認されました。

意思表明に賛同する会員

総会に引き続き、座談会では避難所の鈴木所長さんと佐々木さんとのお話をうかがいました。「災害は忘れた頃にやってくる」という言葉がありますが、津波に何度も見舞われていながら、二世代、三世代と経てしまうと「地震があったら、津波を警戒し、高い所に逃げよ」という昔の人の言い伝えはどうしても忘れられがちです。

それでも、相川地域には津波のおそろしさ、高台に避難することの大切さが語り継がれていました。「津波に備えて集落ごとに避難訓練を実施していたので、集落にいた人たちはほとんど助かっている」とのことでした。むしろ、勤務先や出かけた先で亡くなった方が多かったそうです。

石巻と同じ三陸海岸沿いの気仙沼大島に伝わる「みちびき地蔵」という民話をご紹介します。

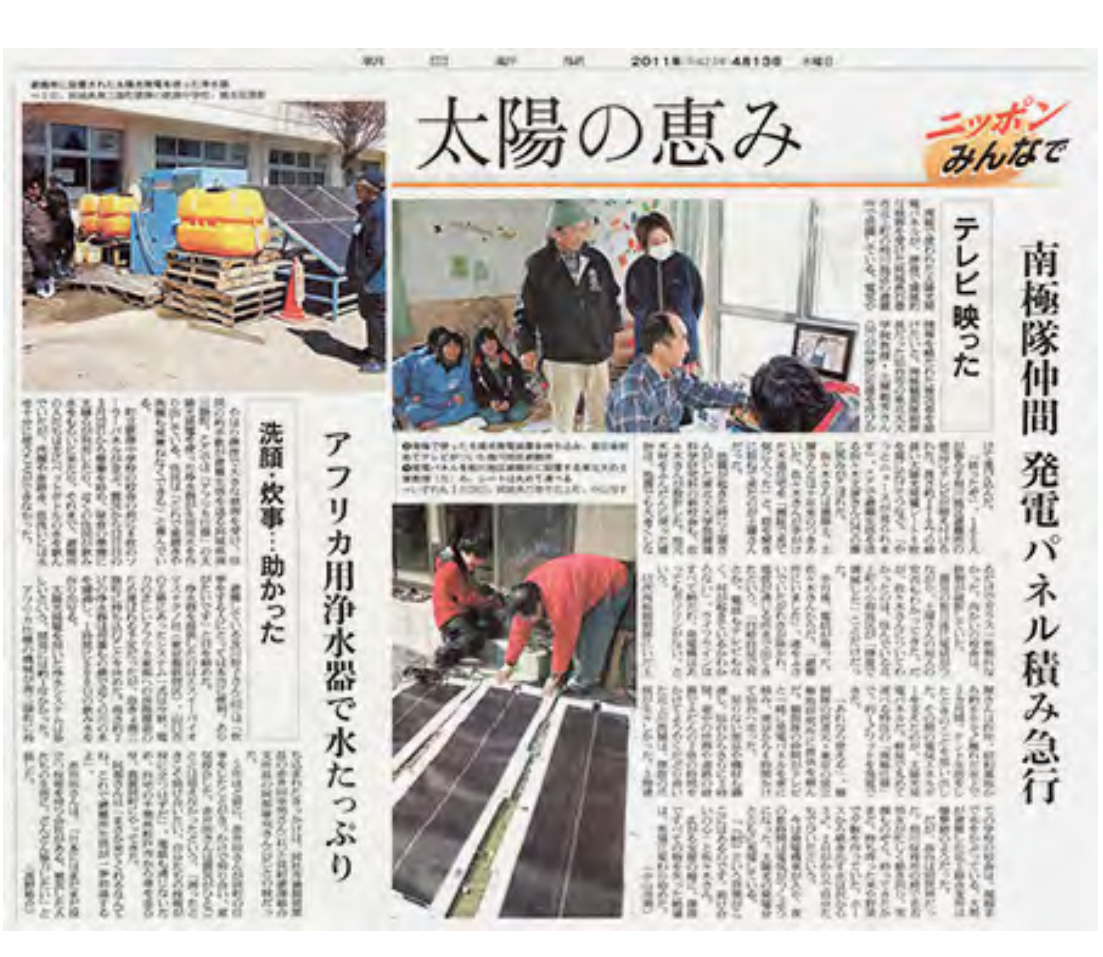
> 気仙沼大島の山の中に、この世を去る人をあの世に導くといわれる「みちびき地蔵」というお地蔵さまがありました。ある女の人が夜の集まりがあってみちびき地蔵のそばを通ると、不思議なことに、元気で船に乗っている若者、おばあさん、子どもを抱いた若いお母さんなど、無数の人の姿が浮かび上がって見えるのです。「なぜ、こんなに大勢の人が…」といぶかしく思いながら、家路につきました。 その翌朝、海に海藻を取りにいくと、やたらとよくとれる。どうしたことかと思っていると、大きな地震が起き、その後に大津波がやってきました。前の晩からいやな予感がしていたその女の人は、子どもの手を引いて、すぐに山の方に逃げました。前夜、みちびき地蔵で姿を見かけた人たちはことごとく津波に呑み込まれて亡くなったのだそうです。

一生に一度来るか来ないか、という頻度でしか遭遇しない津波のおそろしさは、年を経るごとに薄らいでしまいがちです。しかし、このように民話として語り継がれることで、普段の暮らしの中で忘れがちなことを繰り返し思い出す、そのことで、津波が来た時にどうしたらよいかつねに意識することができるようになります。民話や歌などを通して先人の体験を語り継ぐことは、その土地で生きていくために知っておかなければならないことを伝えるための知恵なのではないでしょうか。

集落の力でインフラを整備

所長さんからは150名以上の避難者が集まって住むにあたって最初に取り組んだ課題がトイレの設置であったこと、水の供給のために沢水を引いたこと、集落ごとにパーティションはもうけず緩やかに住み分けをしたことなど、避難所内での日常を成り立たせる苦労のひとつひとつについて、具体的なお話を聴きました。

また、道路アクセスが寸断された相川子育てセンターでは、インフラの復旧がほとんど不可能という厳しい状況に置かれました。そうした中で、沢水の利用、薪での煮炊き、太陽光発電等、ボランティアの人々の助けも得ながらも、集落のメンバーが中心となり、かなり自立した生活が築かれていたのが、この避難所の大きな特徴です。集落の底力、結いの力、自治の力の結晶です。そうした生活の一端が、朝日新聞にも掲載されました。



太陽の恵み

ニッポン みんなで

南極隊仲間 発電パネル積み急行

テレビ映った

アフリカ用浄水器で水たっぷり

洗顔・炊事…助かった

朝日新聞に2011年4月11日に掲載された記事

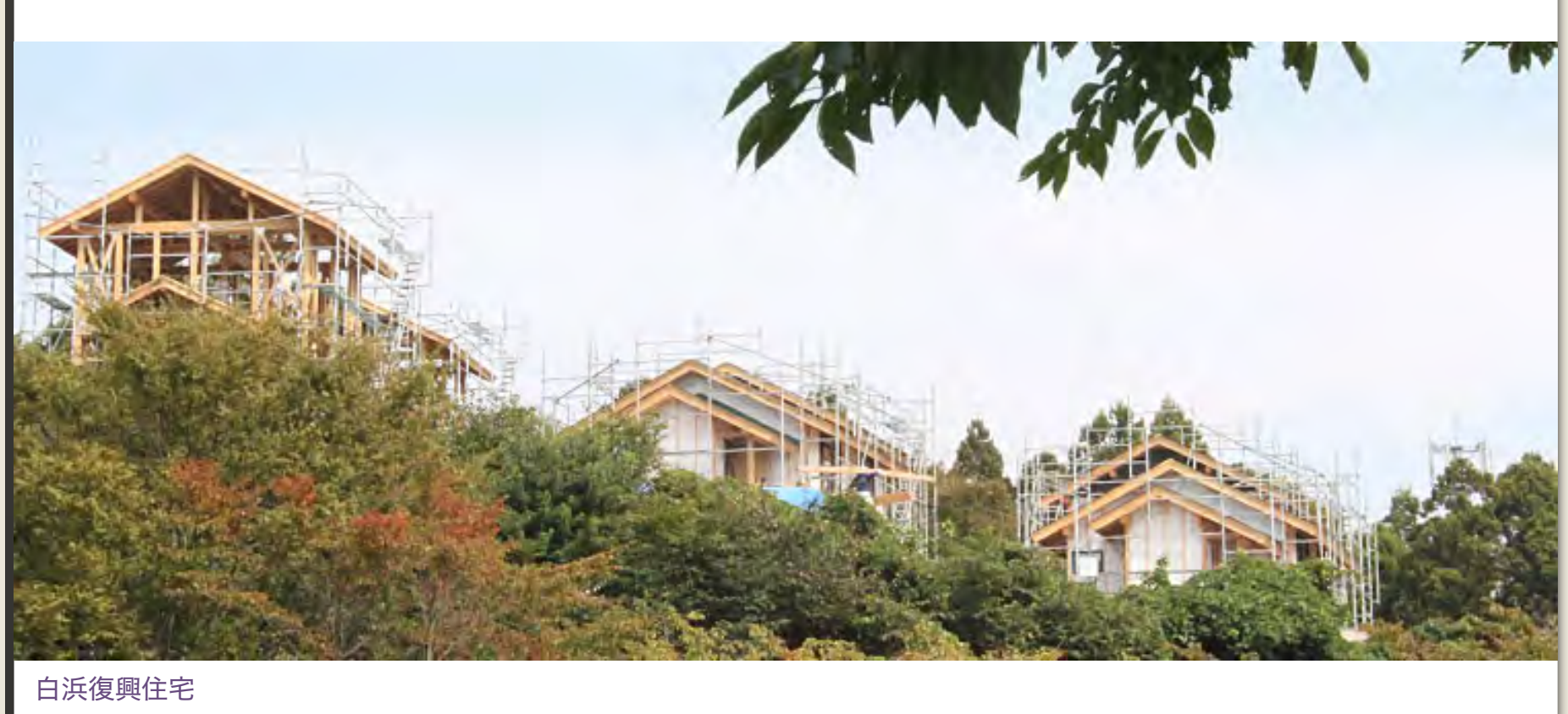
ここで簡単に報告するだけではもったいない内容のお話でしたので、あらためて取材して、東日本大震災後一周年の特集としてご紹介したいと思います。

この動画は非公開です

鈴木さん（相川子育てセンター避難所 元所長）と佐々木さんによる「座談会 津波で被災するということ」のビデオ（27分）

仮設でない復興住宅

総会を後にし、高台に建設中の白浜復興住宅を見学しました。今の仮設住宅は、建設に一戸400万円かかり、2年後には取り壊さなくてはなりません。しかも、その取り壊しにも100万円はかかるのだそうです。であれば、はじめから仮設ではなく、ずっと住み続けられる家を建てた方が良いのでは？というのが「復興住宅」のコンセプトです。



白浜復興住宅

バスに乗り換えるのに自家用車を停めさせていただいていた熊谷産業の熊谷秋雄さんが工学院大学の後藤研究室に相談をもちかけ、この復興住宅プロジェクトがスタート。海の見える高台に熊谷産業が土地を取得、そこに後藤研究室の設計と工学院大学の125周年事業としての寄付金で建設しました。入居者が月２万円程度の家賃を払うことで、将来的には持家になります。「仮設住宅でない復興住宅」の先駆的事例といえるこのプロジェクトは、行政ではなく、民間の出資で成り立っています。

石巻白浜復興住宅に賭ける男　熊谷秋雄氏に聞く
共有
見る YouTube

熊谷さんが白浜復興住宅プロジェクトを語る

プレスリリースには「国の補助で地方自治体が今後建設する災害公営住宅のモデルとなるもので、災害公営住宅として実現した場合に、住まい手の負担も少なく、自治体にとっても負担部分が家賃収入として比較的に短い期間で回収可能な、他に類をみない住宅建設プロジェクト」と、記されています。行政に頼るのでなく、民間の自主的な動きが行政を触発していく、そのようにして物事が動いていくのだということを予感させてくれるプロジェクトです。

高台からは海が一望できます。11月23日には初回入居分の入村式が行われ「海の見えるところに住んでいたい」と、白浜の漁師のご家族が新生活をスタートされたそうです。景色がいいので、昼食は屋外で追分温泉特製のお弁当をいただき、バスツアーは終了しました。

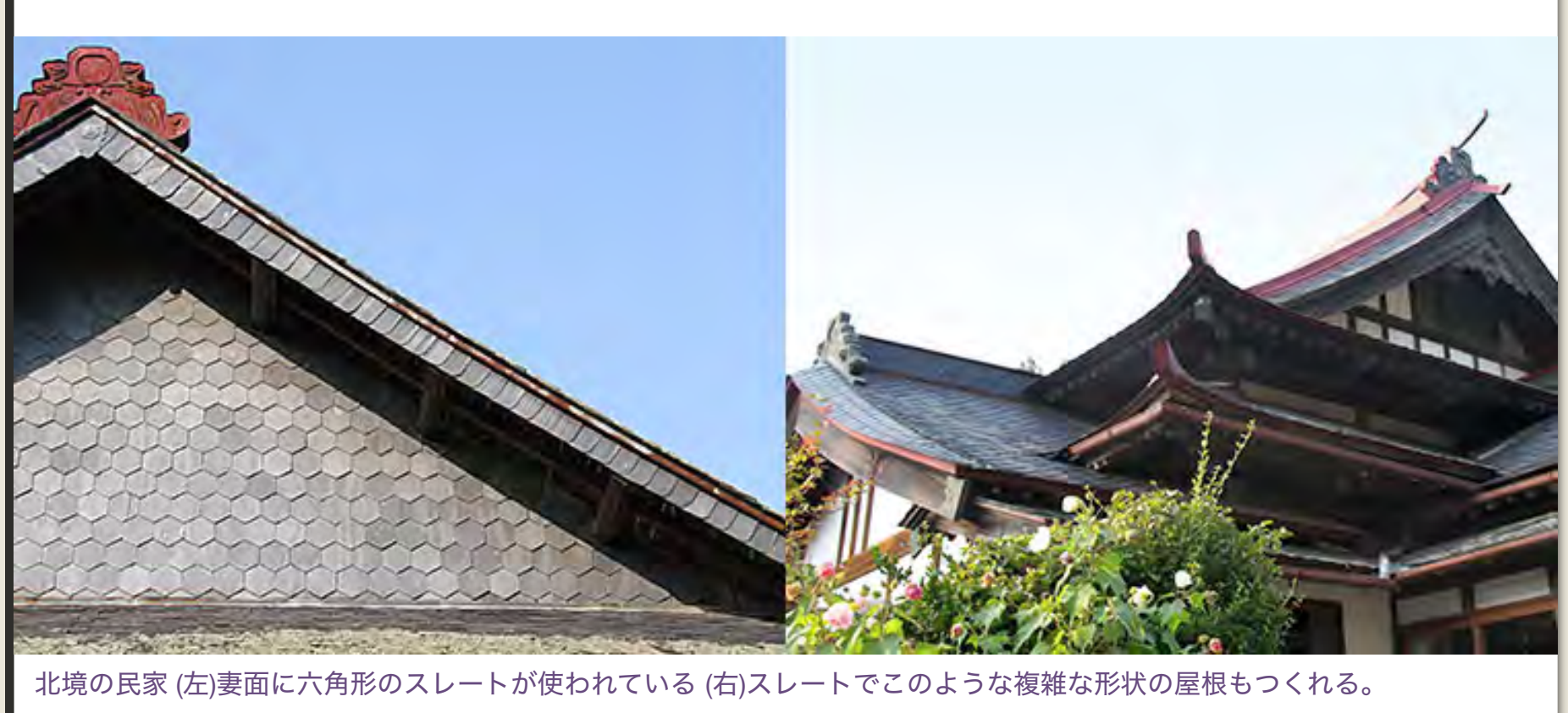
（木の家ネット事務局 持留ヨハナエリザベート）

10/9 一次解散～天然スレート集落、石巻中心部訪問（樹音建築設計事務所 佐見寿喜）

熊谷産業に戻り、自家用車と仙台駅や空港に向かう貸切バスに分乗し、かつて気仙大工が腕を奮った古民家を佐々木さんの設計で現地改修した遠藤邸に向かいました。建て主の遠藤さんの手料理がところ狭しと並べられ、盛大なもてなしを受けました。予定の時間をはるかに超え、ずいぶんと長居をすることに・・・。途中で一次解散の時間となり、飛行機、遠方の方は帰路につきました。これだけの大人数を快く迎えてくださった建主さんと佐々木さんに感謝です。

遠藤邸外観(左)と居間(右)。心のこもったおもてなしに、重ねてお礼を申し上げます。

その後、天然スレート葺きの家が多く残る北境、南境を見学し、石巻市内の石ノ森萬画館の前にある中瀬公園の中洲の、国内最古の木造教会建築である旧石巻ハリストス教会の前で、2次解散となりました。解散後、石巻市内の被災状況を歩いて見たり、地元宮城の建築家や大学関係者、石巻の商店街の皆さんで石巻の未来に向けたまちづくりを考える「石巻まちカフェ」を訪れてお話を伺ったりしました。 まちカフェについて詳しくはこちら



北境の民家 (左)妻面に六角形のスレートが使われている (右)スレートでこのような複雑な形状の屋根もつくれる。

そして、フルコース組が仙台駅にたどり着いたのは、もうすっかり暗くなってから。仙台市内での実行委員会スタッフ打ち上げに県外メンバーの参加も数名あり、もりだくさんだった一日をお酒を酌み交わして終えたのでありました。みなさん、お疲れさまでした！

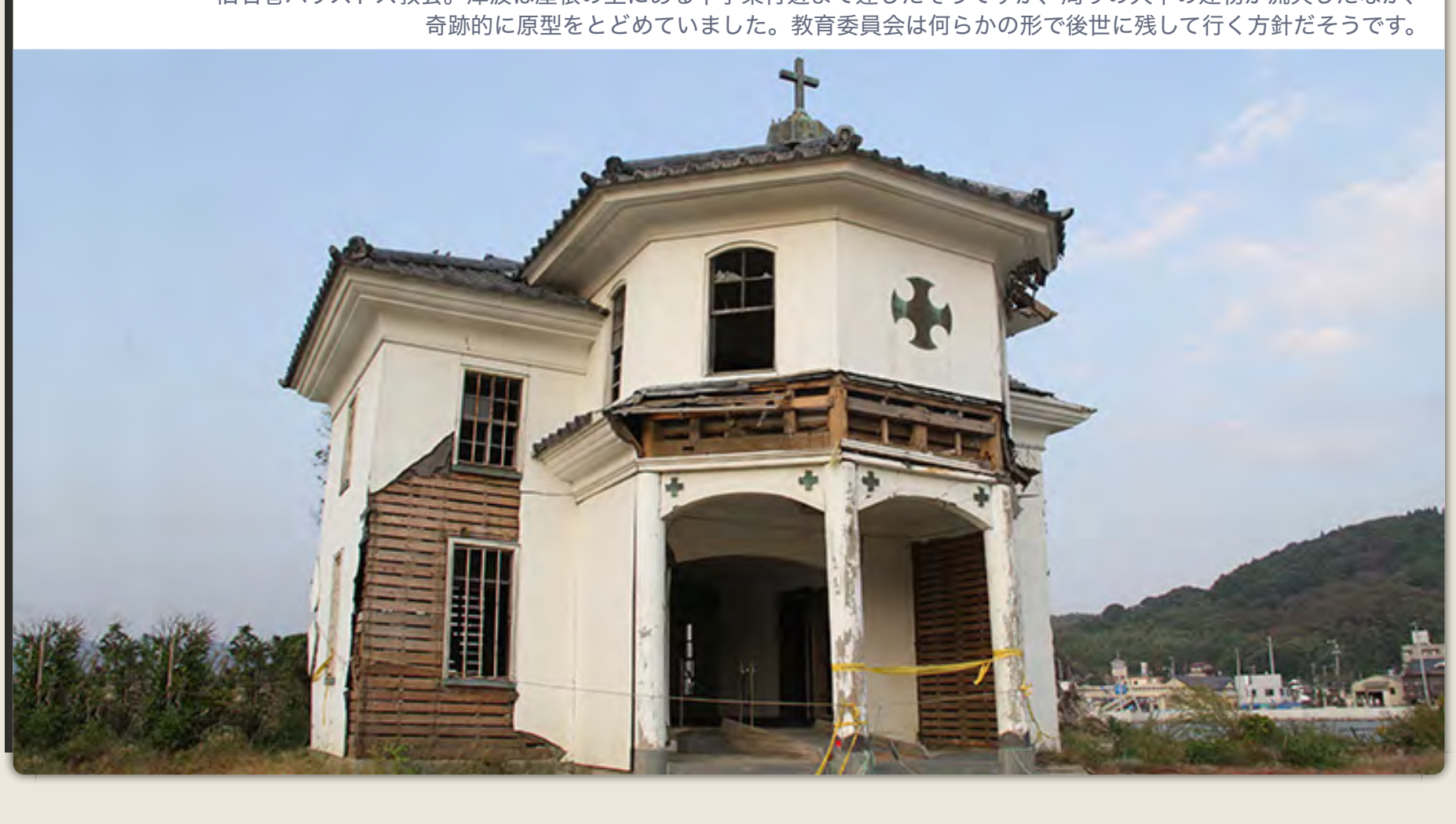
石巻の２次解散で、挨拶をする佐々木文彦さん

（樹音建築設計事務所 佐見寿喜）

👍 Like 0　X ポスト

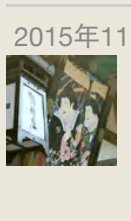
1 2 3 4

旧石巻ハリストス教会。津波は屋根の上にある十字架付近まで達したそうですが、周りの大半の建物が流失したなか、奇跡的に原型をとどめていました。教育委員会は何らかの形で後世に残して行く方針だそうです。



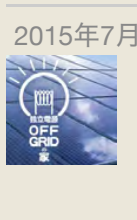
木の家イベントカレンダー

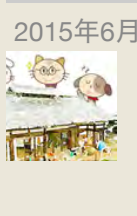
最近の特集記事

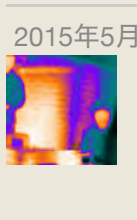
2015年11月9日

第14期 木の家ネット総会 岐阜・加子母大会

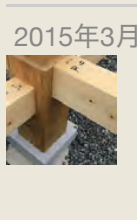
2015年9月15日

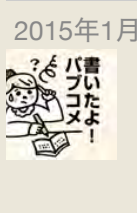
里山循環大工：池山琢馬（一峯建築設計）

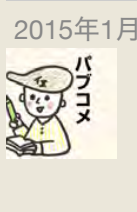
2015年7月27日

独立電源＝オフグリッドの家

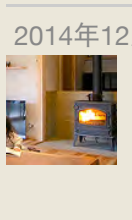
2015年6月13日

どう？ 古民家暮らしって？？

2015年5月6日

冬の温熱調査合宿報告

2015年3月13日

伝統構法をユネスコ無形文化遺産に！

2015年1月6日

私はこう書きました！ 木の家ネット会員が出したパブコメ

2015年1月1日

改正省エネ法についてのパブリックコメントを出そう！

2014年12月12日

改正省エネ法で、土壁はどうなる？

2014年11月26日

無くなっては困る！刻み用電動工具：込み栓角ノミを復活させるためのアクション

人気のある記事

伊勢神宮遷宮・御杣始祭り：300年の大木を伐る！
17件のビュー

家のお風呂　こうやって作る、こうやって保つ
15件のビュー

冬の温熱調査合宿報告
15件のビュー

大工たちによる「家戻し」の記録
14件のビュー

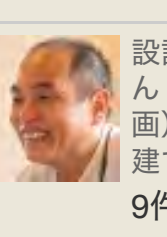
込み栓角ノミ 復活！松井鉄工所訪問記
14件のビュー

古川 保の熊本市川尻町 震災日誌
11件のビュー

設計士・丹羽明人さん(丹羽明人アトリエ)：納得できる答を探して
11件のビュー

工務店・西條正幸さん(ビオプラス西條デザイン)：北海道で無垢の木の家づくり
10件のビュー

設計士・古川保さん(古川設計室)：木の家づくりは仕組みづくり
9件のビュー


設計士・川端眞さん（川端建築計画）：小さな石場建ての家
9件のビュー

この記事のタグ

災害と木の家

同じタグがついた別の記事

2014年6月5日
大場江美さん(サスティナライフ森の家)、日影良孝さん(日影良孝建築アトリエ)：手のひらに太陽の家

2014年3月11日
3.11後を生き抜くコミュニティーの力　牡鹿半島 福貴浦より

2015年7月27日
独立電源＝オフグリッドの家

2016年6月21日
熊本震災レポート２

2016年4月28日
古川 保の熊本市川尻町 震災日誌

関連する記事はこちら

里山循環大工：池山琢馬（一峯建築設計）

3.11後を生き抜くコミュニティーの力　牡鹿半島 福貴浦より

独立電源＝オフグリッドの家

大場江美さん(サスティナライフ森の家)、日影良孝さん(日影良孝建築アトリエ)：手のひらに太陽の家

伝統構法をユネスコ無形文化遺産に！

事務局
〒711-0906
岡山県倉敷市児島下の町5丁目7-3
児島舎内
mail： jimukyoku@kino-ie.net
tel： 086-486-5464